

## 学 位 論 文 の 要 約

三 重 大 学

所属	三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻（博士後期課程） 看護学領域 看護教育学分野	氏名	堀 泰子 ほり やすこ
----	---	----	----------------

主論文の題名

新人看護師の医療安全に関する行動に及ぼす影響

堀 泰子

主論文の要約

導入

新人看護師への医療安全教育は、多くの施設で就職後の早い時点での講義形式の集合研修が主流となっているが、それだけでは臨床現場での医療安全への対応は困難である。一方、看護師の学びには、現場を離れて教育されたことによる学びだけでなく、現場での様々な経験からの学びもある。そこで、新人看護師の医療安全に関する教育を考える場合、現場での経験から、どのような認識を持ち安全行動をとるようになるのか、また、それにはどのような要因が影響するのかということや入職時からの時期による変化を検討することが必要である。

背景

医療安全の確保は、医療の質を左右する最優先課題の一つとなっており、各医療施設への医療安全体制整備が義務化されている。そして、「新人看護職員研修ガイドライン【改定版】」が定められるほど、新人看護師への医療安全研修の必要性が強調され、新人看護師であっても安全な行動をとることは重要な課題である。

そこで、新人看護師が安全な行動をとることに関連する要因を先行研究から検討した。心理学分野では、「楽観性」や「悲観性」が、経験する出来事に対する感情を介して間接的に、あるいは直接的にその後の行動に何らかの影響を与えることが示されている。次に、患者の転倒転落に対する看護師の行動は、日常場面におけるリスク評価や敢行率が影響していることが示されている。同様に、新人看護師の医療における「安全行動」にも、特性や日常場面でのリスク評価・リスク敢行率が何らかの影響を与える可能性がある。そして、医療安全に対して懸念されることを指摘することは、結果的に事故を回避することにつながるとされており、新人看護師が安全に関して懸念されることを指摘できるかどうかは、安全な行動をとれるかどうかに影響する可能性がある。さらに、問題を指摘できるかどうかは、新人看護師の持っている医療安全に対する認識が影響を与えることが推測される。

また、新人看護師は入職から時期を経て現場での経験が増えることにより、安全行動がとれる

ように変化することが予想され、安全行動に影響を与えていると仮定される要因も時期により変化し、それに伴って安全行動との関連も変化する可能性が考えられる。

## 目的

新人看護師の特性（楽観性・悲観性、気楽さ、日常場面でのリスク評価・敢行率）や、安全行動に影響を与える要因（出来事受けとめ、医療安全認識、問題指摘に対する態度）が、安全行動にどのように影響するのかを明らかにするとともに、安全行動と影響要因との関連が1年間でどのように変化するのかを明らかにすることである。

## 方法

自記式質問紙調査による縦断的前向き観察研究で、調査は7月（Time1）、11月（Time2）、3月（Time3）の3回実施した。対象者は、中部・近畿地方に所在する300床以上の総合病院に、2019年4月に初めて入職する新人看護師である。調査内容は、「楽観性」「悲観性」「気楽さ」「日常場面でのリスク評価」「日常場面でのリスク敢行率」（Time1のみ）、「印象に残る経験種類」「出来事受けとめ」「医療安全認識」「問題指摘に対する態度」「安全行動」（Time1、Time2、Time3）である。

分析は、得られたデータについて記述統計を算出した。その後、安全行動に影響を与えると考えた要因から安全行動への影響については、Time1のデータを用いて共分散構造分析を実施した。Time2、Time3は共分散構造分析において検出力不足を引き起こすサンプルサイズであったことから、分析対象とはしなかった。また、安全行動と影響要因の測定時期によるそれぞれの変化には反復測定一元配置分散分析を、安全行動との関連の変化には反復測定の二元配置分散分析をTime1からTime3までの全ての調査を完了した対象に実施した。

## 結果

協力の得られた22施設764名に調査用紙を配布し、165名（回収率21.5%）から回答があり、質問全体に回答のないものを除いた161名（有効回答率97.6%）を分析対象とした（Time1）。

共分散構造分析の結果、「楽観性」「悲観性」「気楽さ」では、いずれも印象に残る経験や出来事への感情を介して「安全行動」に有意な影響はみられなかった。「楽観性」「悲観性」「気楽さ」の中では、「楽観性」のみ「安全行動」へ直接的に正の有意な影響がみられた。次に、「日常場面でのリスク評価」を高く見積もっていても、「日常場面でのリスク敢行率」は高くなっていたが、リスク敢行率のうち、日常リスク敢行率が高い場合は「安全行動」は低く、交通リスク敢行率が高い場合は「安全行動」は高くなっていた。さらに、「問題指摘に対する態度」へ有意な影響を与えていた「医療安全認識」は、「事故防止行動をとることへの不安がある」「当事者としてマイナス評価を受けることへの懸念がある」「医療事故はそれほど起こるものではないと思う」「医療安全と聞いても、自分にはどうすればよいかよくわからない思いである」が負の影響、「ミスの要因を意識する思いである」が正の影響であった。そして、「問題指摘に対する態度」から「安全行動」へは有意な正の影響を与えていた。

測定時期による検討では、「安全行動」とそれに影響する要因それぞれについては経時的な変化は見られなかった。しかし、それぞれの影響要因と「安全行動」との関連では、「悲観性」のみ



に測定時期による影響がみられた。3つの時期のうち、Time1において「悲観性低群」では「悲観性高群」に比べ、「安全行動」平均得点が有意に高かった。また、その傾向はTime2、Time3ではみられなかった。

### 考察

新人看護師の「安全行動」への影響要因として、「楽観性」が直接的な影響を与えていることが示された。これには、ストレスの大きい状況で積極的に目標に向かう行動を起こしやすいという「楽観性」の特徴が影響しており、新人看護師にとってストレスの多い医療現場では、「楽観性」は事故を起こさず患者の安全を守るという重要な目標に向かって積極的に「安全行動」をとることに影響すると考えられた。また、「日常場面におけるリスク評価・敢行率」については、交通リスク評価が高く敢行率が高くても、医療場面では「安全行動」をとることになっていた。これには、交通場面と医療場面ではともに、自分以外の人に影響を与える可能性が高いことが影響しており、交通場面でリスクを高く見積もる場合、医療場面においてもリスクを高く見積もる可能性が示唆された。さらに、5つの「医療安全認識」が「問題指摘に対する態度」へ影響を与えていた。ここから、医療事故はいつでも起こる可能性があり、自分がマイナス評価を受けることよりも、医療安全について懸念されることを指摘することへの抵抗が低い場合、チームメンバーからの指摘にも抵抗がなく、結果的に「安全行動」をとることにつながると考えられた。

また、「安全行動」とそれに影響を与える要因との関連の経時的変化では、「悲観性」のみが関連し、Time1のみ「悲観性低群」が「悲観性高群」に比べて「安全行動」得点が有意に高いことが示された。「悲観性」の高い人はストレスに影響されやすいと推測されることから、新人看護師にとって入職後しばらくはストレスが高いが、時期を経て経験を積むことで新人看護師の感じるストレスが軽減していくことが影響していると考えられた。

### 結論

新人看護師の「安全行動」に影響を与える要因として、以下のことが明らかになった。

1. 「楽観性」「悲観性」「気楽さ」から間接的な「安全行動」への影響はみられなかったが、「楽観性」は「安全行動」へ直接的な正の影響を与えることが示された。
2. 「日常リスク」では、リスクを犯して危険な行動をとりやすい場合、医療場面では「安全行動」を取りにくかった。しかし、「交通リスク」では、リスクを犯して危険な行動をとっても、医療場面では「安全行動」をとることにつながっていた。
3. 新人看護師の医療安全認識では、「事故防止行動をとることへの不安がある」「当事者としてマイナス評価を受けることへの懸念がある」「医療事故はそれほど起こるものではないと思う」「医療安全と聞いても、自分にはどうすればよいかよくわからない思いである」という認識が低いこと、「ミスの要因を意識する思い」という認識が高いことで「問題指摘に対する態度」が高くなり、「安全行動」をとることへ影響を与えることが示された。
4. 「安全行動」と影響要因との測定時期による関連は、「悲観性」のみに有意な関連があり、Time1において「悲観性低群」は「悲観性高群」に比べ「安全行動」平均得

点が有意に高かった。また、Time2、Time3 へと時期を経ると「悲観性低群」と「悲観性高群」での「安全行動」得点の有意な差はみられなくなった。